

誰がどのくらい公共図書館を利用しているのか
 三根慎二* (三重大学 人文学部) 上田修一** (立教大学 文学部)
 mine.shinji@mie-u.ac.jp*, uedas@rikkyo.ac.jp**

近年における公共図書館の利用頻度および利用者像を把握するために、図書館の利用を扱っており、かつ最近実施された全国規模の社会調査およびパネル調査の二次分析を行った。その結果、1)公共図書館の頻繁利用者は14%程度、2)図書館の利用には、継続性が見られ、頻繁利用者、中間利用者、非利用者がいる、3)公共図書館の利用と関係が見られた伝統的な要因は、本研究においても多くは有意であるが一部には有意差はないことがわかった。

1. はじめに

ベレルソン・レポートに象徴される公共図書館の利用者調査は、日本においても一定の蓄積がなされてきた。第1表は、日本において公共図書館を対象に実施、公表された主な利用者調査をまとめたものである。これら先行研究の問題点として、調査の方法(来館者調査が多い¹⁾)、対象(調査対象地域が限定)、項目(1調査での網羅性)、時期(近年未実施)などが考えられる。これら問題点に対して、本調査では、従来、“日本では未発達”²⁾であったとされる方式、すなわち図書館の利用を扱っており、かつ最近実施された全国規模の社会調査およびパネル調査の二次分析を行う。そこから、1)図書館利用頻度を把握し、2)利用頻度に基づいて公共図書館利用者を定義し、3)公共図書館利用と個人属性、社会経済的状況、ライフ

スタイル、メディア・情報源の利用などとの関連を分析し、公共図書館の利用に影響を与えている要因を明らかにする。以上の分析結果から、最終的に公共図書館の利用者像を示すことが、本研究の目的である。

2. 調査方法

本調査における二次分析の対象は、図書館の利用に関する質問が含まれる1)2005年SSM(社会階層と社会移動全国調査)日本調査、2)東京大学社会科学研究所・若年パネル調査および壮年パネル調査(共に2008、2010年実施分の計四調査)の合計五つの個票データである(第2表)。

分析項目は大別して1)図書館の利用頻度、および2)それと先行研究で指摘されている公共図書館の利用に影響を与える要因³⁾との関

第1表. 主な先行研究(日本)の概要

調査者	調査年	調査対象	調査方法	利用頻度
内閣府	1976	盛岡市、水戸市、新潟市、福井市、甲府市、津市、松江市、徳島市、大分市、鹿児島市に居住する満20歳以上の者5,000人	不明	17.4%(利用者)
文部省	1979	全国15歳以上の者3,000人(層化2段無作為)	訪問面接調査	16.9%(全館種)(利用者)
田村, 上田	1980	東京都内公共図書館4館の来館者2,937名	来館者調査	月1回以上(81.8%) 半年1回以上(8.6%) めったに利用しない(9.5%)
糸賀	1983	岩槻市12地区600名(無作為)	住民調査	10.0%(月1.2回) 26.8%(年2.3回)
文部省	1989	全国15歳以上の者3,000人(層化2段無作為)	訪問面接調査	16.9%(公)(利用者)
坂井他	2002	A市立中央図書館の来館者489名	来館者調査	毎週一回程度(47.0%) 1ヶ月に1~2回(46.4%) 1年に数回(6.5%)
歳森他	2003	茨城県立図書館の来館者470名	来館者調査	週一回以上(35.5%) 月に1~2回程度(44.0%) 年に数回(20.4%)
河村他	2006	札幌市北区手稲区および石狩市在住登録者1,881名(無作為)	住民調査(登録者)	主利用館 ほとんど毎日(0.9%) 週に一回程度(11.6%) 一ヶ月に2~3回(38.4%) 一ヶ月に1回程度(19.0%) 年に数回(26.3%) それ以下(3.8%) 一度も行ったことがない(0.0%)

第2表. 各調査の概要

調査名	調査年	対象 (有効回答数、括弧内は回収率)
SSM 日本調査	2005	日本全国に居住する 20~69 歳の男女 5,742 名 (44.1%)
東大社研若年パネル調査	2008	日本全国に居住する 20~34 歳の男女 2,719 名 (80.7%)
東大社研壮年パネル調査	2008	日本全国に居住する 35~40 歳の男女 1,246 名 (87.0%)
東大社研若年パネル調査	2010	日本全国に居住する 20~34 歳の男女 2,174 名 (73.0%)
東大社研壮年パネル調査	2010	日本全国に居住する 35~40 歳の男女 1,012 名 (79.0%)

係の二つに分けられる。利用頻度は、各個票データの図書館の利用頻度を集計するとともに、東京大学社会科学研究所若年・壮年パネル調査を対象に、同一標本の異なる二時点での図書館の利用頻度を比較し、実質的・継続的な図書館の利用頻度を明らかにする。利用要因に関しては、SSM 調査を対象に、先の利用頻度を基準としてまず回答者を頻繁利用者とそれ以外の利用者に分類し、主に先行研究で指摘されている個人属性、社会経済的状況、ライフスタイル、メディア・情報源の利用などの関係を見る。

なお、二次分析の対象となった全調査の設問において、利用する図書館の館種は限定されていない。先行研究および各調査の回答者の年齢、

第3表. 各調査における図書館の利用頻度

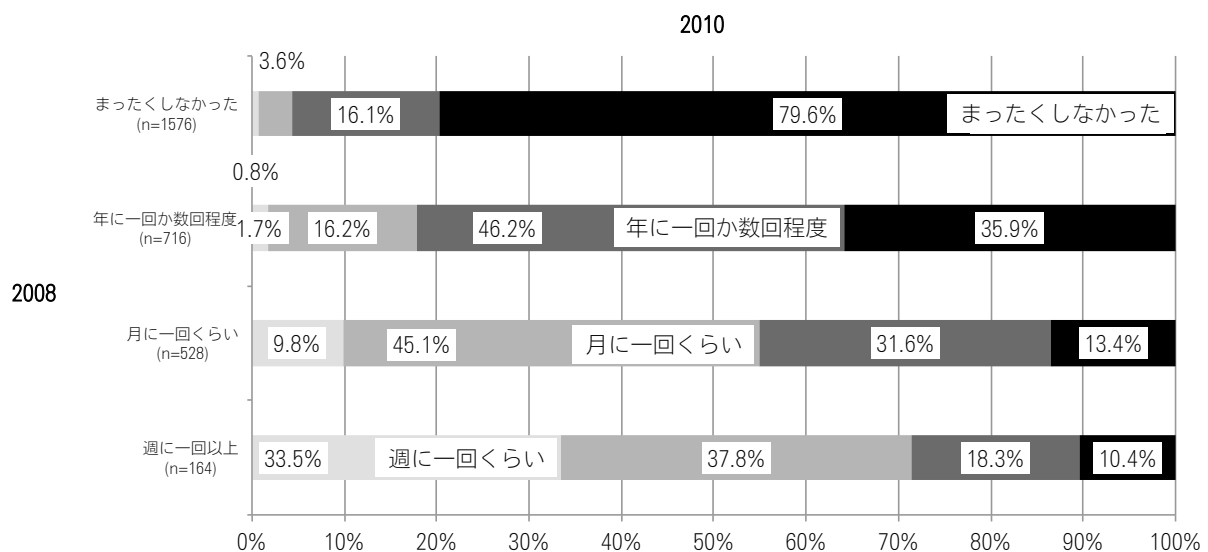
調査名	利用頻度	
SSM 日本調査 (2005)	週一回以上	4.3%
	月一回ぐらい	12.1%
	年に一回から数回	16.9%
	数年に一度ぐらい	11.6%
	ここ数年したことがない	55.1%
東大社研 若年パネル調査 (2008)	週に1回以上	4.7%
	月に1回ぐらい	16.9%
	年に1回か数回程度	24.2%
	まったくしなかった	52.6%
東大社研 壮年パネル調査 (2008)	週に1回以上	5.0%
	月に1回ぐらい	15.0%
	年に1回か数回程度	23.1%
	まったくしなかった	55.4%
東大社研 若年パネル調査 (2010)	週に1回以上	4.1%
	月に1回ぐらい	17.8%
	年に1回か数回程度	26.4%
	まったくしなかった	51.1%
東大社研 壮年パネル調査 (2010)	週に1回以上	4.6%
	月に1回ぐらい	14.7%
	年に1回か数回程度	25.4%
	まったくしなかった	54.5%

職業等を考慮した結果、本研究では、各調査は実質的に公共図書館の利用を示していると考えられる。

3. 結果

3.1 図書館の利用頻度

各調査における図書館の利用頻度を第3表にまとめた。調査間に設問や選択肢の違いはあるが、どの調査においても、1回でも利用したこ



第1図. 2008年および2010年時点での図書館利用頻度の関係

第4表 利用頻度から見た図書館利用者のグループ

	2010								
	利用頻度増		変わらず		利用頻度減		計		
2008	週に一回以上			55	33.5%	109	66.5%	164	100.0%
	月に一回くらい	52	9.8%	238	45.1%	238	45.1%	528	100.0%
	年に一回か数回程度	128	17.9%	331	46.2%	257	35.9%	716	100.0%
	まったくしなかった	321	20.4%	1,255	79.6%			1,576	100.0%
	計	501	16.8%	1,879	63.0%	604	20.2%	2,984	100.0%
頻繁利用者	2008, 2010年とも月一回以上							407	13.6%
中間利用者	頻繁利用者でも非利用者でもない							1322	44.3%
非利用者	常に利用せず							1255	42.1%

とがあれば利用者とみなした場合、回答者の半数弱が図書館を利用していることがわかる。

3.2 公共図書館の実質的利用と頻度

先行研究における図書館利用頻度は、ほぼ全ての場合、調査時点における新規抽出の標本に尋ねた一回限りのもの(クロスセクションデータのスナップショット)である。しかし、パネル調査のデータを用いることで、同一質問に対する同一標本の異なる時点での回答が比較可能であり、“標本が異なることによる差異が含まれることなく時間的推移における集団単位の変化を測定できる”⁴⁾。パネル調査は“時間的な要素を含む調査上の概念を厳密に構成していく上で重要なテクニック”⁵⁾であり、今回のパネルデータから、図書館の利用頻度には継続性が見られるかを実証的に明らかにできる。本研究では、東大社研パネル調査データ(4種類)の同年の若年と壮年調査を統合した上で、2008年と2010年とのデータの比較を行った(第1図)。

2008年に週一回および月一回と回答した利用者は、2010年においても8割から9割程度が継続して図書館を利用しており、継続的あるいは定期的利用者と言えそうである。一方で、年に一回か数回程度になると、同じ頻度の割合が一番高いが、週一回および月一回と比較して、非利用者(まったくしなかった)の割合が3倍程度増加している。非利用者の大半(8割弱)は利用しないままで、利用者に転ずることは多くなく、転じても利用頻度は低く、年に一回か数回程度が最も多い結果となっている。

さらに、利用頻度によって図書館利用者の分類を行ったものが、第4表であり、大別して1)頻繁利用者、2)中間利用者、3)非利用者の3グループになると考えられる。頻繁利用者は、図書館を週一回以上あるいは月に一回くらい継続して利用している集団であるが、全体の13.6%にすぎず、グループとしては最も規模が小さい。中間利用者は、頻繁利用者以外で時期

によって図書館の利用頻度が増減する集団であり、44.3%を占めている。非利用者は、一貫して図書館の利用を全く利用しない集団であり、42.1%と中間利用者と同程度の規模となっていることがわかる。

以上の結果から、図書館の利用には継続性が見られ(全体の63.0%)、月一回の利用までが「図書館の利用」の実質的頻度であると考えられる。つまり、月一回程度の利用者であれば同程度の頻度で図書館を利用し続け非利用者に転ずることも少ない。しかし、年数回程度の利用者は、頻度は変わらないか非利用者に転ずる可能性が高く、図書館の実質的な利用者(図書館の貸出返却を行う)とは言えない。利用しないものの多くは図書館利用者に転ずることは少なく非利用者のままである、ということである(ただし、回答者の年齢が20から40歳までであることは考慮する必要はある)。

3.3 誰が公共図書館を利用しているのか

本節では、図書館の利用頻度と回答者の個人属性、社会経済的状況、ライフスタイル、メディア・情報源の利用などとの関係を、SSM日本調査のデータに基づき見ていく。まず、図書館の利用頻度を、前節で示した実質的利用者である「月一回以上の利用者」と「それ以下の頻度の利用者」とし、回答者を2グループに分類した。次に、先行研究において公共図書館の利用に影響を与えている要因に基づき、SSM調査における項目を選択した(第5表を参照)。以下では、2グループ間と各項目との関連を見ていく。

本研究においても、2グループ間で既存研究において有意な要因とされていた年齢($\chi^2=14.989$ df=4, $p<0.01$)、性別($\chi^2=20.20$ df=1, $p<0.001$)、学歴($\chi^2=101.80$ df=5, $p<0.001$)、ボランティア活動($\chi^2=34.673$ df=2, $p<0.001$)に1%水準で差があることがわかったが、世帯収入($\chi^2=16.946$ df=10, $p<0.1$)に関しては10%水準で有意であった。逆に、家族数(χ

$\chi^2=4.931$ $df=4$, $p=0.294$) は有意ではなかった。

家庭の情報環境に関する項目では、衛星放送・ケーブルテレビ ($\chi^2=2.959$ $df=1$, $p<0.1$), パソコン・ワープロ ($\chi^2=33.118$ $df=1$, $p<0.001$), 高速インターネット回線 ($\chi^2=12.794$ $df=1$, $p<0.001$), 文学全集・図鑑 ($\chi^2=34.240$ $df=1$, $p<0.001$), 15歳当時における家の本の冊数 ($\chi^2=117.495$ $df=6$, $p<0.001$) に有意差が見られたが、電話 ($\chi^2=0.824$ $df=1$, $p=0.364$) には見られなかった。メディア・情報源の利用では、スポーツ新聞・女性週刊誌 ($\chi^2=27.965$ $df=5$, $p<0.001$), 小説や歴史などの本 ($\chi^2=0.824$ $df=1$, $p=0.364$) の行動にも有意差が見られた。

4. 結論

本研究の結果から、1)公共図書館の頻繁利用者は14%程度、2)図書館の利用には、継続性が見られ、頻繁利用者、中間利用者、非利用者がある、3)公共図書館の利用と関係が見られた伝統的な要因は、本研究においても多くは有意であるが一部には有意差はないことがわかった。今後は、多変量解析等を行うことによって、図書館の利用頻度と各種変数との相互関係を分析する。

謝辞

本研究は、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「2005年SSM日本調査」(2005SSM研究会データ管理委員会), 「東大社研・若年パネル調査 (JLPS-Y) wave1-4, 2007-2010」および「東大社研・壮年パネル調査 (JLPS-M) wave1-4, 2007-2010」(東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト) の個票データの提供を受けました。

引用文献

1. 糸賀雅児. “我が国の図書館調査”. 森耕一編. 図書館サービスの測定と評価. 日本図書館協会. 1985, p.85-121.
2. 川崎良孝. “図書館調査と図書館サービス”. 森耕一編. 図書館サービスの測定と評価. 日本図書館協会. 1985, p.37-83.
3. Sin S-CJ. Modeling the impact of individuals' characteristics and library service levels on high school students' public library usage: A national analysis. *Library & Information Science Research*. 2012, vol.34, no.3, p.228-237.
4. 北田淳子. “パネル調査”. 社会調査協会編. 社会調査事典. 丸善出版, 2014, p.114-115.
5. ハンス・ザイゼン. 数字で語る: 社会統計学入門. 2005, 新曜社, 286p.

第5表. 利用者グループ別に見た各項目の割合

		図書館の 利用頻度 月一回以上 (N=462)	図書館の 利用頻度 月一回未満 (N=2,353)	全体
年齢	20代	10.4%	10.8%	10.8%
	30代	24.7%	17.4%	18.6%
	40代	18.0%	19.0%	18.9%
	50代	24.7%	25.4%	25.3%
	60代	22.3%	27.3%	26.5%
性別	男	35.5%	46.9%	46.3%
	女	64.5%	53.1%	53.7%
学歴	中学	6.3%	18.2%	16.6%
	高校	48.9%	57.9%	55.9%
	高専・短大・専修学校	13.2%	6.9%	8.1%
	大学・大学院	31.2%	16.8%	19.2%
世帯収入	100万円	1.5%	3.5%	3.2%
	200万円	3.9%	6.1%	5.7%
	300万円	8.9%	7.9%	8.1%
	400万円	8.2%	9.9%	9.6%
	500万円	8.0%	7.2%	7.4%
	600万円	7.8%	6.7%	6.9%
	700万円	5.8%	4.7%	4.9%
	800万円	6.3%	4.4%	4.7%
	900万円	4.1%	2.9%	3.1%
	1000万円以上	10.0%	11.3%	11.1%
	不明	35.5%	35.3%	35.3%
家族数	1名	6.7%	5.6%	5.8%
	2名	21.7%	23.9%	23.5%
	3名	25.7%	22.5%	23.0%
	4名	23.7%	22.7%	22.8%
	5以上	22.2%	25.3%	24.8%
家庭の情報環境	電話 (携帯・PHS含む)	97.8%	98.4%	98.3%
	衛星放送・ケーブルテレビ	53.5%	49.1%	49.8%
	パソコン・ワープロ	82.7%	69.5%	71.7%
	高速インターネット回線	40.0%	31.5%	32.9%
	文学全集・図鑑の所有	45.7%	31.6%	33.9%
		※あり・なし		
15歳当時における家の本の冊数	10冊以下	15.4%	28.6%	26.4%
	11~25冊	14.9%	18.1%	17.5%
	26~100冊	35.1%	25.1%	26.7%
	101~200冊	12.8%	7.2%	8.1%
	201~500冊	9.3%	3.1%	4.2%
	501冊以上	3.9%	1.6%	2.0%
自己評価による社会的地位	上	0.6%	0.6%	0.6%
	中の上	23.4%	16.9%	18.0%
	中の下	44.2%	37.6%	38.7%
	下の上	17.3%	20.7%	20.1%
	下の下	4.1%	6.8%	6.3%
	わからない	10.4%	17.4%	16.2%
子どもには出来るだけ 高い教育を受けさせるのが良い	そう思う	21.9%	16.3%	17.2%
	どちらかといえばそう思う	43.9%	35.9%	37.2%
	どちらかといえばそう思わない	17.5%	21.9%	21.2%
	そう思わない	13.6%	19.7%	18.7%
	わからない	3.0%	6.2%	5.7%
ライフスタイル	ボランティア活動	40.5%	26.9%	29.2%
	※あり・なし			
メディア・情報源の利用	スポーツ新聞・女性週刊誌	84.0%	75.4%	76.8%
	小説や歴史などの本	89.6%	60.3%	65.1%

※図書館利用頻度と同尺度、一度でも
ある回答者の割合